

令和7年度 社会参加活躍支援等孤独・孤立推進交付金成果報告書
(社会参加活躍支援等孤独・孤立推進関連事業(個別支援事業))

※ 本報告は、交付金計画1件ごとに作成してください。

都道府県名	福島県	市町村名	白河市
-------	-----	------	-----

1. 交付対象事業の名称

白河市ひきこもり等孤独・孤立対策推進事業

2. 交付対象事業の重要業績評価指標(KPI)実績

	指標名	令和7年度目標値	令和7年度実績値
	ひきこもりなどの孤独・孤立の問題に関する相談延べ件数(件)	1,110	1,571
KPI①	本年度は世代限定を外して幅広い世代の方を支援対象とし、対象者の状態に捉われない「孤独・孤立対策」へと支援の枠を拡大した。これに伴い、市の掲示板、広報誌、ウェブサイト、SNS等、多角的な広報活動を展開した結果、潜在的な支援ニーズの掘り起こしにつながった。 特に、幅広い世代に対して情報が届いたことが目標値を上回る相談件数(達成率142%)に直結したものと考えられる。		
	指標名	令和7年度目標値	令和7年度実績値
	社会参加活動の参加者延べ人数(人)	150	272
KPI②	本年度より孤独・孤立の問題を抱える幅広い世代の方を支援対象とし、「本人の主観的な孤独感」に着目することで、支援対象者の心理的ハードルが下がり、多様な背景を持つ当事者の参加を促すことができた。 また、他団体との連携による「あったかカフェ(認知症カフェ)」への参加や新規に創設した「ボランティア部」での活動など、社会参加の選択肢を多角化したことが利用者の所属感の向上と継続的な参加につながった。 加えて、令和4年度から継続している「オンライン居場所」が定着しだし、リピーター層が安定的に推移したことも実績値を押し上げる要因となった。		
	指標名	令和7年度目標値	令和7年度実績値
	社会参加活動への定着支援延べ件数(件)	40	206
KPI③	今年度より本格的に取り組むようになった定着支援において、未対面の当事者への定期的な手紙の送付に加え、支援中断者や家族への再アプローチを積極的に実施した。 また、面談や社会参加への障壁となっていた「交通手段の欠如」という個別ニーズに対し、移動支援等の柔軟な対応を徹底したことが大幅な実績値の増へとつながった。 一方で、本事業を通じて地方特有の交通インフラの弱さが社会参加を阻害している実態が明らかとなり、移動支援を含めた包括的な定着支援の重要性が改めて確認された。		

3. 本事業による社会参加者数及び就業者数

事業に参加した人数	108	事業に参加した人数のうち 就職氷河期世代の割合	31%
-----------	-----	----------------------------	-----

社会参加者数	37	社会参加をした人のうち 就職氷河期世代の割合	30%
--------	----	---------------------------	-----

就業者数	3	うち 就職者数	3	うち正規	
				うち非正規	3
		うち、その他就業（自営、起業、内職等）			

就業者数 (年齢階層別)	～40歳		41歳～45歳		46歳～50歳		51歳～	
	就職(正規)		就職(正規)		就職(正規)		就職(正規)	
	就職(非正規)	2	就職(非正規)	1	就職(非正規)		就職(非正規)	
	その他就業 (自営、起業、内職等)		その他就業 (自営、起業、内職等)		その他就業 (自営、起業、内職等)		その他就業 (自営、起業、内職等)	

4. 事業の実施状況及びその成果等

●事業の実施状況

本年度は支援対象者のニーズに合わせた多様な居場所づくりや社会参加活動（ボランティア活動＋勉強会＋オンライン居場所）を展開し、下記のとおり居場所づくりには延べ364人、社会参加活動には延べ272人の参加があった。

【居場所づくり】

○毎月開催（年間の参加者延べ人数）

- ・女性のための居場所：28人
 - ・男子会：48人
 - ・あろんりーの居場所（孤独感を感じる方の居場所）：110人
 - ・ある活（歩くだけの活動）：49人
 - ・ゆる活（対面×オンラインの対話のうち対面での参加）：40人
 - ・つな活（屋外での交流活動）：56人
 - ・もりびと会（ひきこもり状態の方の居場所）：3人
- 不定期開催（年間の参加者延べ人数・開催月）
- ・まほろん見学：5人（4月）
 - ・モルック体験：4人（8月）
 - ・ハレルヤカフェ参加：4人（9、10、1、3月）
 - ・だるまの会参加：11人（9、11月）
 - ・静かにすごしてもいい場所：6人（3月）

【社会参加活動】

○ボランティア活動（年間の参加者延べ人数・開催月）

- ・ゴミ拾いボランティア：38人（4、6、8～10、12、1～3月）
- ・パン配布ボランティア：3人（4、7月）
- ・農作業ボランティア：9人（4～6月）
- ・認知症カフェボランティア：19人（4～12月、2、3月）
- ・除草ボランティア：17人（6～8月、10月）
- ・環境整備ボランティア：4人（7月）
- ・清掃ボランティア：11人（9、12月）
- ・箱詰め作業ボランティア：8人（11月）
- ・落ち葉拾いボランティア：9人（11月）
- ・片付けボランティア：5人（3月）

○勉強会（年間の参加者延べ人数・開催月）

- ・パソコン入力練習：3人（3月）

○オンライン居場所（年間の参加者延べ人数・開催月）

- ・茶の間会、こもりーぬ（オンライン居場所）：82人（4～3月）
- ・ゆる活（対面×オンラインの対話のうちオンラインでの参加）：62人（4～3月）
- ・ただ活オンライン：2人（1月）

●事業開始から現在に至るまでの総括

本事業は令和3年度に「就職氷河期世代ひきこもり対策」としてスタートし、本年度は「ひきこもり等孤独・孤立対策」へと支援対象者を拡充させてきた。

この変遷に伴い、支援の幅を広げてきた成果と課題は以下のとおりである。

【成果：場の多様化による参加促進】

事業開始当初から課題を一つひとつ汲み取り、プログラムの多様化を図ってきた結果、参加者の選択肢が広がり、現在の参加者延べ人数に結びついている。

支援対象者の広がり(孤独・孤立対策へのシフト)が、より多くの層にリーチする要因となった。

【課題：支援ニーズとのミスマッチ】

一方で、長年の課題として「即効性を求める当事者・家族のニーズ」と、ひきこもり相談支援センターが重視する「伴走型支援」との間に生じるミスマッチがある。

これにより、一部の相談が継続に至らないケースが依然として存在しており、初期段階での期待値調整や信頼関係構築が不可欠である。

●来年度(令和8年度)の展望

これまでの総括を踏まえ、次年度は以下の支援を実施する。

【超低ハードルな支援メニューの展開】

相談員と直接関わることへの心理的障壁を軽減するため、オンラインによる一方通行型(ラジオ風)の情報発信を実施する。

また、個々の状況や属性で区別しない「多様性の場(誰でも参加できる場)」を設けることで、現状の受容や支援対象としてのラベリングといったネガティブな印象を排除し、より参加しやすい入り口を構築する。

【エンゲージメントの重要性】

支援が届きにくい層(アウトリーチが必要な層)に対し、より丁寧なアプローチを行い、既存の伴走型支援へとつなげる体制を構築していく。

当成果につきましては、令和8年5月20日に行われました白河市ひきこもり支援機関定例会にて報告し、検証を行いました。

おもな意見は以下のとおりです。

・電話定着がメール手紙定着やSNS定着と比べて少ない要因については、特に若年層にとって電話よりメールやSNSの方が気軽にやりとりできるため、より好まれる傾向が影響しているのではないかと。

・中高年層の女性の相談が若年層の女性の相談に比べて少ない要因については、近年のジェンダー観の変化に伴って若年層の女性の問題意識が顕在化する方向にある一方で、中高年層の女性については、ひきこもりや孤独・孤立の問題を抱えている場合でもいわゆる「家事手伝い」としてスルーされてしまう傾向が依然として存在していることが影響しているのではないかと。

また、有識者(東北福祉大学森教授)にも検証を依頼予定です。